北陸朝日放送

事業の名称

新型コロナウイルス拡大初期から学ぶ「情報リテラシー」

共同で事業を実施した団体

石川県内５つの小学校、立命館大学国際関係学部国際関係学科・白戸圭一教授、金沢星稜大学総合情報センター・山本輝太郎講師

事業概要

インターネットの発達に伴い、多くの情報を得られると同時に、容易に情報発信ができるようになり、多大なメリットを享受しています。その半面、誹謗中傷、人権侵害、デマの拡散などの急増が社会問題となっています。

かつては、新聞やテレビなどの信頼できる報道機関からの情報をそのまま受け入れる時代だったのが、多種多様な媒体の出現によって、情報が氾濫する時代となり、誤った情報、正しい情報を見抜く力が重要視されています。

そこで、これからの時代を生きていく子どもたちに、能動的に正しい情報と誤った情報を取捨選択する情報リテラシーを高めていくための出前授業を企画しました。

題材として選んだのは新型コロナウイルスにおける情報発信です。2020年１月に国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されてから感染が急拡大。“未知のウイルス”への恐怖は、社会を大きく混乱させました。感染者やその家族、医療従事者に対する差別や誹謗中傷、デマ、真偽不明の情報の拡散などが起こり、報道機関はこれまで経験したことのない事態に、どのように伝えるか、葛藤しながら報道を続けてきました。

授業では、当時の▽社会混乱、▽デマの拡散、▽地元のテレビ報道――を、当社の記者が説明するとともに、専門家の解説や、ゲーム形式の体験を通じて、誤った情報と正しい情報の見抜き方、情報リテラシーを高めていく方法を伝えました。

■対象：石川県内の小学生（高学年の児童）
■内容：報道記者が、新型コロナウイルスの取材経験の説明。専門家が、情報を取捨選択するポイントの説明。間違った情報が発生する仕組みを児童が実体験。
■講師：大学教授、大学講師、報道デスク、報道記者等
■実施校：石川県加賀市及び宝達志水町の公立小学校

第１日目	６月27日	勅使小学校（小学校６年生　計18人）
		分校小学校（小学校５、６年生　計36人）
第２日目	７月４日	錦城小学校（小学校５年生　計60人）
		山代小学校（小学校６年生　計91人）
第３日目	10月24日	樋川小学校（小学校５、６年生　計33人）

※　授業の様子を報道取材し、ＨＡＢニュースで伝えた。

※　一部の授業の様子を約30分の動画にまとめ、YouTube北陸朝日放送公式チャンネルで配信した（https://www.youtube.com/watch?v=_ZIBX5rBbZ8）

事業の成果

県内５つの小学校で実施しました。

■　記者による授業

講師として当社報道情報センターの記者が小学校を訪問し、新型コロナ拡大初期に起きた社会の混乱について、当時の取材ビデオを交えながら対面形式で説明しました（トイレットペーパーの買い占め騒動やデマの被害に遭ったスーパーの取材）。

また、記者が、テレビ報道はどのような情報をもとにニュース取材をしていたか、コロナ禍の取材で悩んだ点や、対応に苦慮した点について説明しました。

＜授業の様子＞

＜記者による授業＞

■　専門家による授業

専門家（大学教授など）が、誤った情報をどのように見極めればよいか、インターネット上にあふれる情報と、どう向き合うべきかについて説明しました。

＜伝言ゲーム＞

立命館大学国際関係学部国際関係学科の白戸圭一教授が講演し、誤った情報が発生する仕組みをゲーム形式（伝言ゲーム）で教えました。

１班十数人のグループになり、児童が隣の児童に口頭で文章を伝言していき、最後の児童が、伝言された文章を発表して、最初と違う内容になったことを実感。思い込みで人に伝えることで間違った情報が出来上がるという仕組みを理解しました。

＜立命館大学 白戸教授＞

＜伝言ゲームの様子＞

＜アンケートによる結果の差異＞

金沢星稜大学総合情報センターの山本輝太郎講師が、アンケートの質問方法で結果が変わることについて講演しました。

質問の聞き方が違う２種類のアンケートを用意し、実際に児童にアンケートを取り、聞き方によって、印象が変わり思い込みが生まれ、アンケート結果が大きく変わることを伝えました。

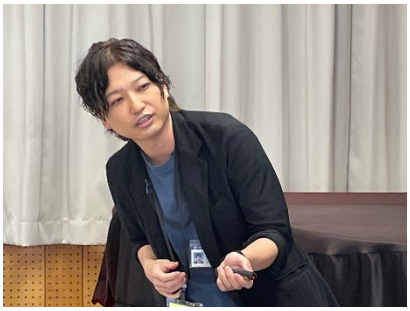
例１：織田信長の身長について「175cm よりも高いと思うか」と「150cm よりも低いと思うか」⇒（聞き方で、170cm 前後と 150cm 前後の回答に分かれた）

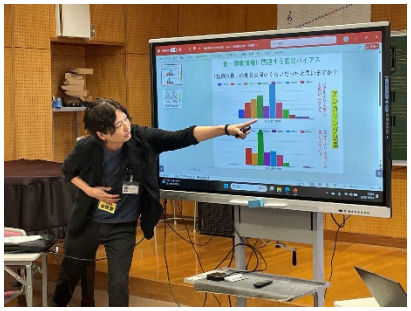
例２：交通事故の車のスピードについて、「激突しました」と「ぶつかりました」⇒（大事故と軽傷事故の回答に分かれた）

アンケート方法で、結果の差が大きく出ました。子どもたちは、▽伝聞などの二次情報が、間違った情報につながるリスクを体感し、スマホ等で発信する情報が誤った情報になって、自らが加害者になりうる危険性がある、▽間違った情報をもとに行動することでパニックを起こす、▽誹謗中傷などで、人の心を傷つけることがある――ことを学びました。

正しい情報・誤った情報を見抜くポイントとして、以下の点が重要だと教えました。

① 他の情報と比べてみる（本、新聞、テレビ等）
② 情報の発信元を確かめる（信頼できる人、媒体か）
③ その情報はいつ書かれたものか確かめる（状況が異なることもある）
④ 一次情報を確かめる（元のオリジナルの情報源）





＜金沢星稜大学 山本講師の授業＞

■児童の反応

・ たった十数人の伝言ゲームでも（最初と最後で）ぜんぜん違う意味になっていたりしていて、６列（６組）あったのに全部違ったからすごいと思いました。間違った情報を正しい情報だと思ってしまったら、取り返しのつかないぐらい大変なことになってしまうかもしれない。今回学んだことを活かして、間違った情報と正しい情報を区別できるようがんばります。

・ 今日の授業で、デマを見分ける方法が分かった。伝言ゲームをして、一次情報、二次情報と、繰り返していくと、本当に最初の情報が間違って、違うことを広めていくことにな

るということが分かった。大人になって役立つことを知ったので、貴重な体験ができてよかったし、楽しかった。

・　自分はまだスマホを使っていない。使っていなくても人の口から出た言葉がどんどん正確さを失っていくことに驚いた。スマホは知らない人にも情報がいくからこわいと思った。自分で発信するときは、意見と事実を分けて話す、情報が正しいか調べてみる、を繰り返していきたいと思った。

・　情報の見分け方の勉強をして、自分で確かめないで、思い込みで人に広めると、本当でないのに、みんなが信じ、困る人が出てくることが分かりました。これからは、その情報が本当なのか、嘘なのかを自分で確かめてから、みんなに伝えるようにしたいです。

■オンラインフォーラムで取り組みを紹介

2025 年２月 12 日、「セーファーインターネットデー2025 JAPN フォーラム」で当社の取り組みを紹介。「セーファーインターネットデー」は、より良いインターネット環境づくりを推進するために世界 180 カ国以上の国や地域が参加する取り組みです。

オンラインで開かれたフォーラムでは、総務省や日本ユニセフ協会をはじめ、６つの企業・団体が取り組みを紹介し、当社も民放連のメディアリテラシー活動助成事業として石川県内の小学校で実施した今回の取り組みについて紹介しました。

■総括

新型コロナウイルスという子どもたちが実際に体験した出来事を題材としてテレビ局が出前教室を開き、自社のニュースや番組の映像を用いて、報道記者やデスクが偽・誤情報が拡散した実例を紹介しました。また、大学教員や教育委員会、小学校の担当者とともに授業の内容を協議し、子どもたちの発言やディスカッションの時間を大切にできたこと、伝言ゲームやクイズなどを通じて体験を重視した授業を実施したことにより、子どもたちの情報リテラシー教育に役立てることができたと考えています。

また、出前授業の様子をまとめた動画の公開や、「セーファーインターネットデー2025 JAPAN フォーラム」で発表の機会をいただけたことにより、「偽・誤情報を見抜く力を養う」出前授業を多くの人に知っていただくことができました。

デジタル時代における子どもたちへの情報リテラシー教育は、今後ますます重要性を増していくと考えています。当社として継続的な取り組みを検討するとともに、今後、子どもたちへの教育が一層、充実していくことを願っています。

以　上